水野祐先生を悼む

瀧澤武雄

早稲田大学名誉教授文学博士水野正図通称祐先生はかねて老衰のため病床にあられましたが、本年（二〇〇〇年）七月以降食欲が著しく減退したため、入院加療に努めておられました。併し御家族の御手厚い看護も及ばず、急性肺炎を併発され、八月二六日午後一〇時二六分遂に永眠されました。享年八二歳。惜しみても余りあり、後進として衷心哀悼の意を捧げるものであります。御遺骨は、一六九一（元禄四）年以来水野家の菩提寺であった本郷丸山（現在は菊坂）の長泉寺墓地に埋葬されました。

先生は石坂良作氏の長男として一九一八（大正七）年に出生されましたが、四〇（昭和一五）年母方の水野家の養子となり、その家督を継承されました。この水野家は、徳川家康の生母於大の方を出した水野氏の一族で、文明年間尾張大高城主であった水野貞守の弟為善を祖とし、江戸時代には五百石取の旗本でありました。先生は終始この家系に誇りを持ち、その出自にふさわしく凛然とした生涯を送られたのであります。先生が今次大戦中蒙彊にあって、一兵士として八路軍（共産軍）と生死を賭して対峙しておられたとき、その感慨を万葉調の歌に託して表現された（戦後歌集『由留多』として纏められている）のも、古武士が戦陣にあっても風流を忘れなかった古事を偲ばせるものがあります。

先生は三五（昭和一〇）年東京府立第二中学校（現都立立川高校）を四年で退学し、第一早稲田高等学院に入学されまし

たが、これは同校一年のとき、西村真次著『国民の日本史大和時代』を熟読し、この先生の許で日本史学の研究に進もうと決心されたことによるものでありますが、この決心には少年の頃、厳父のご指導により遺跡や遺物の探求に深い興味を持たれていたことも大きな素因になっていたと思われます。

高等学院終了後先生はさらに文学部史学科国史専修に進まれ、西村教授指導の下に、古代史研究に精進され、約一ヶ月の実地踏査を経て、学部卒業論文『出雲文化の研究』を作成提出されました。私たち後輩の間で、この論文は大部なので、リヤカーで運んだという「傳説」が生れていましたが、実に一三三六枚に及ぶ論文で内容も卓越優秀と認められて、恩賜記念賞を授与されております。

先生は四一（昭和一六）年三月大学を優秀な成績（優等賞を受けた）でご卒業になり、同年七月文学部助手となり、以来講師、助教授を経て、六一（昭和三六）年教授に昇任され、八九（平成元）年定年でご退職になりましたが、応召出征の期間を除き、早稲田大学に於いて後進の育成に励むと共に、古代史研究に没頭され、厳密な史料批判と、人類学的研究方法を併せたユニークな学風を樹立され、その成果は多数の著書・論文となって残されました。それらのうち主要なものは『水野祐著作集』一〇巻に纏められていますが、中でも文部省大学院特別研究生終了時に文部省に報告書として提出された『日本古代王朝史論序説』をはじめ、大隈記念学術奨励賞を受けた『出雲国風土記論攷』、同記念学術褒賞を与えられた『評釈魏志倭人伝』は特に広く深く学界に影響を与えた業績であります。

先生はまた第一文学部長、商議員会副会長、古代エジプト調査室長、ラグビー部長として、夫々の分野で業績を残されると共に、立川市史をはじめとする市史・区史の編纂にも尽力されました。

先生とおつきあいさせていただいて既に半世紀を過ぎました。その間の思い出は、到底この短文に尽くすことはできませんが、先生の学風は、先生の育てられたお弟子さん方に引き継がれ、早稲田史学として、さらに発展していくことが予見されます。先生どうか天上から暖かく見守ってください。

謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。